

当院における *Campylobacter* 属菌検出方法の検討

◎鈴木 更織¹⁾、長田 正和¹⁾、杉浦 麻友¹⁾、竹田 良一¹⁾
西尾市民病院¹⁾

【はじめに】*Campylobacter* 属菌は家畜が流産や腸炎を起こす菌として認識され、人では汚染された鶏肉に関連する食中毒起因菌であり日常検査において正しく検出する必要がある。【背景】地域医療連携病院から *Campylobacter jejuni* の検出報告がされ、ICT 会議で当院の検出状況等の話し合いを行った。【目的】下痢原性 *Campylobacter* 属菌の検出に必要な条件を洗い出し、確実に検査できる体制を構築する。【材料および方法】微好気培養、湿潤状態で 24 時間から 48 時間、既知検体 *Campylobacter jejuni*、*Campylobacter coli* を培養し観察した。従来使用孵卵器と新孵卵器での発育の有無を確認、35℃と 42℃の培養温度で比較をした。使用培地は現行法のキャンピロバクター 10%ヒツジ血液培地（日本 BD）と CCDA 生培地 SEL（関東化学）、バイタルメディア mCCDA 培地（極東製薬）およびポアメディア mCCDA 培地（栄研化学）の夾雑菌の発育を抑制する選択分離培地を用い比較した。発育したコロニーを観察しグラム染色を行った。ハッカー染色とバーミー染色で後染色のサフラニンとピフェル液を染色時間 1 分で染色性の比較を

行った。グラム陰性らせん状桿菌を全自動同定分析装置（VITEK2[®]フル）で測定し *Campylobacter* 菌種を同定確認した。【結果および考察】42℃、48 時間培養で新孵卵器では発育を認めたが、従来使用孵卵器は発育を認めなかった。孵卵器の温度は 42℃の方が 35℃より発育が良好であった。湿潤状態は、軽く湿らせた程度よりも水分量を増やした方がコロニーの大きさ、数ともに有意であった。各社 4 培地の選択分離培地の集落の形状に差を認め、当院ではポアメディア mCCDA 培地（栄研化学）が検出、発育共に良好で釣菌が容易であった。グラム染色試薬の染色性の比較はハッカー染色よりもバーミー染色の方が観察し易く、サフラニンよりピフェル液は赤味が強く *Campylobacter* 属菌の染色には適していた。【結語】*Campylobacter* 属菌は便グラム染色で、菌量が少ないと見つけられないことも多いが、検出出来ると臨床的意義が高い。目的菌を良好に検出するために *Campylobacter* 選択分離培地を有効に使用する必要がある。臨床が食中毒を疑う際は、確実に検出し治療に貢献していきたい。細菌検査室-(0563)56-3171 内線 2265